

人間としての悲しみを知る —竹久夢二 生活の美術を—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

女子の高等教育が始まり、女学生が誕生する。少女雑誌が刊行され、憂いを帯びたまなざしの儚げな女たちの挿絵が評判を呼ぶ。抒情的な画風は夢二式美人と呼ばれ、多くの女学生を魅了した。

明治・大正・昭和を通じて一世を風靡した竹久夢二（1884—1934）は美人画にとどまらず広告、ポスター、日用雑貨のデザインなど幅広い分野で活躍した。既成の画壇とは無縁で詩、童話、小説など文筆活動にも精を出す。多彩な作品には恋愛遍歴などみずからの経験が投影されていた。

在野の画家として全国各地を旅し、欧米諸国も訪れる。現実から遊離した高踏芸術ではなく移り変わる世情を創作の原動力としていた。「絵は僕の命だ」と日露戦争、大逆事件、関東大震災などの激動の時代を渾身の筆致で描いていく。

白衣の骸骨に寄り添って泣く

夢二は現在の岡山県瀬戸内市で代々酒造業を営む家の次男として生まれた。本名は茂次郎。兄が亡くなり、事実上の長男として育てられる。

15歳で神戸の叔父宅に寄宿し、のちの神戸一中（兵庫県立神戸高校）に入学した。ところが家業の造り酒屋をたたんで父が操業間近の八幡製鉄所に就職することになり、夢二も中退して現在の福岡県北九州市八幡東区に一家で移り住む。

しばらく夢二も製鉄所で働いたものの不満が募り、母と姉に詩人になりたいと打ち明けて家出する。17歳で上京し、早稲田実業学校に入学した。

詩人になる夢はなかなか叶わなかった。のちに夢二は「私は詩人になりたいと思った。けれど私の詩稿はパンの代わりにはなりませんでした。あるとき私は文字の代わりに絵の形式で詩を^か画^えいてみた。それが意外にもある雑誌に発表せらるること



竹久夢二

になったので臆病な私の心は狂喜した」と述懐している。ある雑誌とは平民社発行の『直言』だ。下宿で同居する友人の社会主義者・荒畑寒村の紹介で21歳になる夢二の風刺画が掲載された。

幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三らが集う平民社は当時、日露戦争に反対して非戦論を唱えていた。夢二の風刺画は白衣の骸骨に寄り添って泣く丸髷の女性を描いている。戦争で犠牲になるのは兵士だけではなく女性や子供も傷つけるという悲痛なメッセージが込められていた。

諷刺画が注目されるなかで『中学世界』に投稿した「^{つついづつ}筒井筒」が第一賞に入選し、画家としての礎を築く。このとき初めて夢二と名乗った。

児童向け雑誌の表紙、口絵、挿絵などを手がけるようになり、画文集も旺盛に制作する。私生活では早稲田鶴巻町で書店を営んでいた岸たまきと結婚し、三人の息子をもうけた。

読売新聞で時事スケッチを担当し、25歳のとき

初の著書『夢二画集－春の巻』がベストセラーになる。女性を中心に熱烈に支持され、詩人の萩原朔太郎は夢二を「明治の歌麿」と評した。

スケッチブックを手にもって

社会主義者や無政府主義者を取り締まる大逆事件の検挙が始まり、夢二も関与した容疑で2日間拘留される。1911年、大逆事件の被告で冤罪を訴えていた幸徳秋水、管野スガラが処刑された。号外売りが街を走り、夢二は途方に暮れる。

時代は明治から大正に移り、夢二は絵入り小唄集『どんたく』を出版。特に三行詩の「宵待草」が人気を呼ぶ。「待てど暮らせど来ぬひとを 宵待草のやるせなさ 今宵は月も出ぬそうな」。のちに曲がつけられ、全国的な愛唱歌となった。

30歳になって現在の中央区八重洲に港屋絵草紙店を開店し、自分でデザインした千代紙、便箋、封筒などを販売する。来店した女子美術学校学生の笠井彦乃に「話したいことよりも何よりもただ逢うために逢いたい」と恋焦がれて交際を始めた。たまきと別れて京都に転居し、しばらく同棲したものの彦乃は結核によって短い生涯を終える。

彦乃の死後、東京美術学校の人気モデルお葉と知りあい、渋谷・宇田川町に所帯を持つ。一児をもうけたものの夭折し、6年後に離別する。

どんたく図案社を新たに設立し、三越や千疋屋のポスター、絵はがき、包装紙、チラシ、新聞・雑誌の広告、看板、浴衣などあらゆる美術装飾を請け負った。夢二を近代グラフィック・デザインの先駆者と見做しても過言ではないだろう。「芸術は壁に飾るものではなく、人の生活に取り入れてはじめて生きるもの」と信じていた。

しかし1923年、関東大震災によってすべてが失われる。夢二はスケッチブックを手にもって被災後の東京を歩きまわり、東京新聞の前身である都新聞に東京災難画信と題したルポルタージュを寄稿・連載した。人心は荒廃し、自警団と称する排外主義が跋扈し、弱肉強食の地獄と化していた。「恐怖時代の次に来る極端な自己主義よりも、廃頹が恐ろしい」と警鐘を鳴らしている。

翌年、アトリエ兼自宅の少年山荘＝山帰来荘を現在の世田谷区松原に建設し、活動を再開した。

新たに発刊された婦人グラフの表紙絵・口絵用に浮世絵風の新版画「秋のしらべ」などを発表する。

女性や子供たちの姿から

昭和になって6年目の1931年、夢二は47歳で渡米する。横浜から出港し、ハワイのホノルルを経由してサンフランシスコに到着した。アメリカには1年3カ月ほど滞在し、西海岸各地で個展を開いた。だが大恐慌の影響もあって不調に終わり、みじめな貧乏旅行を余儀なくされる。

失意のうちに渡欧し、約1年にわたってドイツ、フランス、オーストリア、スイス、チェコスロバキアなどの各都市をめぐった。多くのスケッチ画を描き、日本の新聞や雑誌に寄稿する。

ドイツの首都ベルリンでは美術学校で日本画の特別講義を行う。とはいえ気分は晴れなかった。独裁者ヒトラーが首相に就任し、ナチス・ドイツによるファシズムの台頭に危機感を覚える。

海外生活は約2年半に及び、夢二は帰国を決意した。イタリアのナポリから約1カ月かけて神戸港に着く。帰国後、日本占領下の台湾で竹久夢二画伯滞欧作品展覧会が開催され、夢二も招かれて講演を行った。だがここでも不穏な空気が漂っていた。1931年の満州事変を契機として軍部が中国に侵攻し、泥沼の日中戦争へ突入していく。

まもなく結核を患って病床に臥す。親切な文芸仲間の手配で長野県・八ヶ岳山麓の富士見高原療養所に移り、「ありがとう」の言葉を最後に49歳で息を引きとった。東京・豊島区の雑司ヶ谷霊園に埋葬され、のちに文京区弥生に作品や遺品などを所蔵した竹久夢二美術館が開設される。

晩年の夢二は群馬県の榛名湖の湖畔に榛名山美術研究所を建設するという構想を抱いていた。笠井彦乃に宛てた手紙で「虚偽と薄情とを画材とせる流行画家の馬鹿馬鹿しさ」と憤り、市井の人々の生活と密接に結びついた美術活動をめざす。

そして「ほんとに人間としての悲しみを知る画かきが出てきても好いと思う」と熱望した。人間としての悲しみを知るとは他者の痛み、悩み、苦しみに共振する利他的な情感とっていいだろう。夢二が好んで描いた女性や子供たちの姿から人間への哀切な想いが伝わってくる。